

国語
問題
用紙

組 番 号	氏 名
3 年 組 番	

小川さんは、国語の授業で【I】の文章を読み、【II】のようにグループで話し合いました。後の(一)～(五)の問いに答えなさい。(【I】はページごとに上段から下段に続いている。)

【I】授業で読んだ文章

「僕(岩崎ミツル)」は転校生の青木万里夫と仲良くなった。万里夫はサーカス団の一員で、公演のために各地を転々とする生活を送っている。次の場面は、ある日の朝のことである。

寒い朝だった。僕と妹は深い雪のなかを学校へ向かっていた。今日から三学期がはじまる。妹は小さな手袋をはめて首にはマフラーを巻いている。二人の吐く息は真っ白だった。ゆべ降り積もった雪はいまはやんで、朝の光にきらきらと輝いている。

雪原の一本道を黙々と歩いてたときだった。誰かが遠くで呼んでいるような気がして僕は足を止めた。だが雪の原が広がっているだけで人影は見えなかった。気のせいだろうか、そう思っ歩き出そうとしたとき、すぐ背後から呼び止められた。

「岩崎ミツル」

出席簿を読み上げるみたいな、抑揚のない声だった。その高音の混じった声に聞き覚えがあった。万里夫の声にちがいないかった。

「青木……? どこにいるんだ」

周囲を見まわした。妹も声がしたほうを見ている。だがその声は方角の定まらない音声で、どこから聞こえてきたのかよくわからない。周囲

は畑で、いまはその上を厚い雪が覆っている。ひとが隠れる場所はない。細い樹木が雪のなかから数本顔を出しているが、そんな細い木の陰では、とてもひとが隠れることはできない。そう思いながらその木を見ていたとき、まるで木の幹がスリットになったみたいに、そこから空間の裂け目を押し割るようにして万里夫が出てきた。まるで白い雪景色のカートンを切り裂くみたいにして彼の体が現れたのだった。

僕は息を呑んだ。妹も声も立てずに、彼のほうをじっと見ている。

「驚いた?」万里夫はうつすらと微笑んでいる。「夏からずっと、このトリックを考えていたんだ。どうにか完成してみたんだ」

妹が木に駆け寄って、その裏側を調べている。何も見つけられなかったのか、 と戻ってきた。

「いったいどうやって……」

「仕掛けは教えられない。すごく複雑なんだ」

彼は満足そうに言った。彼のこんなに豊かな表情を見るのは、はじめてだった。気がつくとは彼は両手に大きなポストンバッグをさげている。学校の鞆は持っていない。

「どうした。学校へは行かないのか?」

「さよならだ」彼は静かに言った。「手紙が来たんだ」

彼は遠い町の名を言った。その町にこれから旅立つのだと言う。たぶんそこは、もう菜の花が咲きはじめているだろう。それくらい遠い町だった。

「ほかの荷物は別便で送った。学校へも昨日、手続きに行った。きみだけには、さよならを言いたかった」

寒いせいだろうか、僕は胸が締めつけられるみたいな、息苦しい感じにとらわれた。本当に彼は旅立つんだ、そう思うと、かるい怒りのようなものがこみ上げてきた。もっと親しくしておけばよかった。

「クラスのみんなに挨拶していかないのか」

「先生もそう言ってた。でも今日の列車の切符を速達で送ってきたから、もう時間がない。それに……」そこで彼は言いよんだ。「①いつか、友達なんていらないうて言っただろう」

「冷たいんだな」

「あんなの嘘だ。今日みたいな日が辛くないように、そうしてるだけだ」

そのことはわかっていた。そう気がついたのはつい最近だが、僕には何もかもわかっていたような気がする。「……残念だな」と僕は言った。

②「一人だけ友達ができた。それで充分だ」真っ白な息と一緒に言葉を吐き出した。「あれを返すよ」ポストンバッグを下に置いて彼は両手のひらを差し出すと妹に向かって、「この手に触ってみて」と言った。

妹はおそるおそる手を差し出して彼の手に触れた。じっとしてるんだよ、と万里夫が言った。つぎの瞬間、妹が短く叫んだ。何が起きたのか一瞬わからなかった。妹は彼に向かって、ありがとうありがとう、と言っている。それから妹は僕に、てのひらのなかのものを差し出して見せた。小さな手のなかに、二匹のカブト虫が載っている。それらは大きな角を振りかざして、きしきしと動いていた。

「いつか、返すって言っただろう」

「だっていまは冬だ。いったい、どこから……」

「手品の原則は、絶対に仕掛けを教えないこと。……でも今日で最後だ」

から特別に教える。簡単さ。昆虫に関する本を片端から調べて、保温器と日照時間を調節する器具をつくる。根気があるけど、あとはトランプと同じように取り出すだけでいい。……もう行かなくちゃ」

彼はポストンバッグを持ち上げた。そして、さっき現れた木のほうへ、ゆつくりと歩きはじめた。彼が何をしようとしているのかわかったような気がして、僕は呼び止めた。

「待てよ、まだ訊きたいことがある」

その声を無視するように彼は木に近寄っていく。そして、その背後を通り抜けた。笑いながら、またこちらへ戻ってくる。

「あそこで消えると思ったんだろう。でも、そんなことはしない。僕は消えるのは上手じゃないんだ。駅まで歩いていく」

「送るよ」

「私も！」

「いいよ、ひとりで行ける」

僕と妹は黙った。ついてくるな、と彼が言ったのだった。だが僕と妹にその声は聞こえなかった。カブト虫を大切に手のなかで暖めている妹をうながして、僕は歩きはじめた。

(薄井ゆうじ「青の時間」による。)

※1 スリット＝切れ目。

※2 手紙＝万里夫の母親からの手紙。万里夫の母親は、先に新しい地に移っていた。

【Ⅱ】話し合いの一部

小川

私たちのグループは、登場人物の心情について話し合いたいと思います。まず、万里夫の心情について、話し合しましょう。

高野

私は、万里夫の「僕は消えるのは上手じゃないんだ」という言葉が印象に残りました。みなさんは、この言葉から、万里夫のどのような心情を読み取りましたか。

村田

万里夫は突然木の陰から現れたときと同じように、消えてみせたかったけれど、消えるトリックが上手ではないので、「僕」たちの前から消えることができなかったのだと思います。それで、万里夫は悔しくなり、ひとり去ろうとしたのだと思います。

秋山

たとえトリックが完成していて消えることができたとしても、万里夫は「僕」たちの前から突然消えようとはしなかったのではないのでしょうか。万里夫が「消えるのは上手じゃない」と言ったのは、「僕」との別れに関係があると思います。

清水

私も、秋山さんの意見に賛成です。万里夫の言動に着目すると、万里夫が消えてしまわずに、木の背後を通り抜け、笑いながら「僕」たちの方へ戻ってきたのは、万里夫にとって「僕」が、気持ちを **A** くれるような、たった一人の特別な友達だったからではないかと思います。

高野

確かにそうかもしれません。あそこで消えることを、「**B**」ときっぱり言い切っていることから、やはり自分の意志であえて消えずに、「僕」との別れを惜しんでいたのでしょうか。

秋山

駅まで送っていかうとする「僕」たちに「ついてくるな」と言ったのは、別れのときが後に延びれば延びるほど、別れたくないという気持ちになってしまふと考えたからではないでしょうか。

小川

なるほど。みなさん、いろいろなことを読み取ったんですね。では、続いて「僕」の心情について話し合しましょう。
(この後も話し合いは続いた。)

(一) 【Ⅰ】の **□** に入る言葉として、最も適切なものを、次のア～エの中から選んで、その記号を書きなさい。

ア おどおど

イ ずけずけ

ウ しずしず

エ すくすく

(二) 【I】に ① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿ ㏀ ㏁ ㏂ ㏃ ㏄ ㏅ ㏆ ㏇ ㏈ ㏉ ㏊ ㏋ ㏌ ㏍ ㏎ ㏏ ㏐ ㏑ ㏒ ㏓ ㏔ ㏕ ㏖ ㏗ ㏘ ㏙ ㏚ ㏛ ㏜ ㏝ ㏞ ㏟ ㏠ ㏡ ㏢ ㏣ ㏤ ㏥ ㏦ ㏧ ㏨ ㏩ ㏪ ㏫ ㏬ ㏭ ㏮ ㏯ ㏰ ㏱ ㏲ ㏳ ㏴ ㏵ ㏶ ㏷ ㏸ ㏹ ㏺ ㏻ ㏼ ㏽ ㏾ ㏿ 㐀 㐁 㐂 㐃 㐄 㐅 㐆 㐇 㐈 㐉 㐊 㐋 㐌 㐍 㐎 㐏 㐐 㐑 㐒 㐓 㐔 㐕 㐖 㐗 㐘 㐙 㐚 㐛 㐜 㐝 㐞 㐟 㐠 㐡 㐢 㐣 㐤 㐥 㐦 㐧 㐨 㐩 㐪 㐫 㐬 㐭 㐮 㐯 㐰 㐱 㐲 㐳 㐴 㐵 㐶 㐷 㐸 㐹 㐺 㐻 㐼 㐽 㐾 㐿 㑀 㑁 㑂 㑃 㑄 㑅 㑆 㑇 㑈 㑉 㑊 㑋 㑌 㑍 㑎 㑏 㑐 㑑 㑒 㑓 㑔 㑕 㑖 㑗 㑘 㑙 㑚 㑛 㑜 㑝 㑞 㑟 㑠 㑡 㑢 㑣 㑤 㑥 㑦 㑧 㑨 㑩 㑪 㑫 㑬 㑭 㑮 㑯 㑰 㑱 㑲 㑳 㑴 㑵 㑶 㑷 㑸 㑹 㑺 㑻 㑼 㑽 㑾 㑿 㒀 㒁 㒂 㒃 㒄 㒅 㒆 㒇 㒈 㒉 㒊 㒋 㒌 㒍 㒎 㒏 㒐 㒑 㒒 㒓 㒔 㒕 㒖 㒗 㒘 㒙 㒚 㒛 㒜 㒝 㒞 㒟 㒠 㒡 㒢 㒣 㒤 㒥 㒦 㒧 㒨 㒩 㒪 㒫 㒬 㒭 㒮 㒯 㒰 㒱 㒲 㒳 㒴 㒵 㒶 㒷 㒸 㒹 㒺 㒻 㒼 㒽 㒾 㒿 㓀 㓁 㓂 㓃 㓄 㓅 㓆 㓇 㓈 㓉 㓊 㓋 㓌 㓍 㓎 㓏 㓐 㓑 㓒 㓓 㓔 㓕 㓖 㓗 㓘 㓙 㓚 㓛 㓜 㓝 㓞 㓟 㓠 㓡 㓢 㓣 㓤 㓥 㓦 㓧 㓨 㓩 㓪 㓫 㓬 㓭 㓮 㓯 㓰 㓱 㓲 㓳 㓴 㓵 㓶 㓷 㓸 㓹 㓺 㓻 㓼 㓽 㓾 㓿 㔀 㔁 㔂 㔃 㔄 㔅 㔆 㔇 㔈 㔉 㔊 㔋 㔌 㔍 㔎 㔏 㔐 㔑 㔒 㔓 㔔 㔕 㔖 㔗 㔘 㔙 㔚 㔛 㔜 㔝 㔞 㔟 㔠 㔡 㔢 㔣 㔤 㔥 㔦 㔧 㔨 㔩 㔪 㔫 㔬 㔭 㔮 㔯 㔰 㔱 㔲 㔳 㔴 㔵 㔶 㔷 㔸 㔹 㔺 㔻 㔼 㔽 㔾 㔿 㕀 㕁 㕂 㕃 㕄 㕅 㕆 㕇 㕈 㕉 㕊 㕋 㕌 㕍 㕎 㕏 㕐 㕑 㕒 㕓 㕔 㕕 㕖 㕗 㕘 㕙 㕚 㕛 㕜 㕝 㕞 㕟 㕠 㕡 㕢 㕣 㕤 㕥 㕦 㕧 㕨 㕩 㕪 㕫 㕬 㕭 㕮 㕯 㕰 㕱 㕲 㕳 㕴 㕵 㕶 㕷 㕸 㕹 㕺 㕻 㕼 㕽 㕾 㕿 㖀 㖁 㖂 㖃 㖄 㖅 㖆 㖇 㖈 㖉 㖊 㖋 㖌 㖍 㖎 㖏 㖐 㖑 㖒 㖓 㖔 㖕 㖖 㖗 㖘 㖙 㖚 㖛 㖜 㖝 㖞 㖟 㖠 㖡 㖢 㖣 㖤 㖥 㖦 㖧 㖨 㖩 㖪 㖫 㖬 㖭 㖮 㖯 㖰 㖱 㖲 㖳 㖴 㖵 㖶 㖷 㖸 㖹 㖺 㖻 㖼 㖽 㖾 㖿 㗀 㗁 㗂 㗃 㗄 㗅 㗆 㗇 㗈 㗉 㗊 㗋 㗌 㗍 㗎 㗏 㗐 㗑 㗒 㗓 㗔 㗕 㗖 㗗 㗘 㗙 㗚 㗛 㗜 㗝 㗞 㗟 㗠 㗡 㗢 㗣 㗤 㗥 㗦 㗧 㗨 㗩 㗪 㗫 㗬 㗭 㗮 㗯 㗰 㗱 㗲 㗳 㗴 㗵 㗶 㗷 㗸 㗹 㗺 㗻 㗼 㗽 㗾 㗿 㘀 㘁 㘂 㘃 㘄 㘅 㘆 㘇 㘈 㘉 㘊 㘋 㘌 㘍 㘎 㘏 㘐 㘑 㘒 㘓 㘔 㘕 㘖 㘗 㘘 㘙 㘚 㘛 㘜 㘝 㘞 㘟 㘠 㘡 㘢 㘣 㘤 㘥 㘦 㘧 㘨 㘩 㘪 㘫 㘬 㘭 㘮 㘯 㘰 㘱 㘲 㘳 㘴 㘵 㘶 㘷 㘸 㘹 㘺 㘻 㘼 㘽 㘾 㘿 㙀 㙁 㙂 㙃 㙄 㙅 㙆 㙇 㙈 㙉 㙊 㙋 㙌 㙍 㙎 㙏 㙐 㙑 㙒 㙓 㙔 㙕 㙖 㙗 㙘 㙙 㙚 㙛 㙜 㙝 㙞 㙟 㙠 㙡 㙢 㙣 㙤 㙥 㙦 㙧 㙨 㙩 㙪 㙫 㙬 㙭 㙮 㙯 㙰 㙱 㙲 㙳 㙴 㙵 㙶 㙷 㙸 㙹 㙺 㙻 㙼 㙽 㙾 㙿 㚀 㚁 㚂 㚃 㚄 㚅 㚆 㚇 㚈 㚉 㚊 㚋 㚌 㚍 㚎 㚏 㚐 㚑 㚒 㚓 㚔 㚕 㚖 㚗 㚘 㚙 㚚 㚛 㚜 㚝 㚞 㚟 㚠 㚡 㚢 㚣 㚤 㚥 㚦 㚧 㚨 㚩 㚪 㚫 㚬 㚭 㚮 㚯 㚰 㚱 㚲 㚳 㚴 㚵 㚶 㚷 㚸 㚹 㚺 㚻 㚼 㚽 㚾 㚿 㜀 㜁 㜂 㜃 㜄 㜅 㜆 㜇 㜈 㜉 㜊 㜋 㜌 㜍 㜎 㜏 㜐 㜑 㜒 㜓 㜔 㜕 㜖 㜗 㜘 㜙 㜚 㜛 㜜 㜝 㜞 㜟 㜠 㜡 㜢 㜣 㜤 㜥 㜦 㜧 㜨 㜩 㜪 㜫 㜬 㜭 㜮 㜯 㜰 㜱 㜲 㜳 㜴 㜵 㜶 㜷 㜸 㜹 㜺 㜻 㜼 㜽 㜾 㜿 㝀 㝁 㝂 㝃 㝄 㝅 㝆 㝇 㝈 㝉 㝊 㝋 㝌 㝍 㝎 㝏 㝐 㝑 㝒 㝓 㝔 㝕 㝖 㝗 㝘 㝙 㝚 㝛 㝜 㝝 㝞 㝟 㝠 㝡 㝢 㝣 㝤 㝥 㝦 㝧 㝨 㝩 㝪 㝫 㝬 㝭 㝮 㝯 㝰 㝱 㝲 㝳 㝴 㝵 㝶 㝷 㝸 㝹 㝺 㝻 㝼 㝽 㝾 㝿 㞀 㞁 㞂 㞃 㞄 㞅 㞆 㞇 㞈 㞉 㞊 㞋 㞌 㞍 㞎 㞏 㞐 㞑 㞒 㞓 㞔 㞕 㞖 㞗 㞘 㞙 㞚 㞛 㞜 㞝 㞞 㞟 㞠 㞡 㞢 㞣 㞤 㞥 㞦 㞧 㞨 㞩 㞪 㞫 㞬 㞭 㞮 㞯 㞰 㞱 㞲 㞳 㞴 㞵 㞶 㞷 㞸 㞹 㞺 㞻 㞼 㞽 㞾 㞿 㟀 㟁 㟂 㟃 㟄 㟅 㟆 㟇 㟈 㟉 㟊 㟋 㟌 㟍 㟎 㟏 㟐 㟑 㟒 㟓 㟔 㟕 㟖 㟗 㟘 㟙 㟚 㟛 㟜 㟝 㟞 㟟 㟠 㟡 㟢 㟣 㟤 㟥 㟦 㟧 㟨 㟩 㟪 㟫 㟬 㟭 㟮 㟯 㟰 㟱 㟲 㟳 㟴 㟵 㟶 㟷 㟸 㟹 㟺 㟻 㟼 㟽 㟾 㟿 㠀 㠁 㠂 㠃 㠄 㠅 㠆 㠇 㠈 㠉 㠊 㠋 㠌 㠍 㠎 㠏 㠐 㠑 㠒 㠓 㠔 㠕 㠖 㠗 㠘 㠙 㠚 㠛 㠜 㠝 㠞 㠟 㠠 㠡 㠢 㠣 㠤 㠥 㠦 㠧 㠨 㠩 㠪 㠫 㠬 㠭 㠮 㠯 㠰 㠱 㠲 㠳 㠴 㠵 㠶 㠷 㠸 㠹 㠺 㠻 㠼 㠽 㠾 㠿 㡀 㡁 㡂 㡃 㡄 㡅 㡆 㡇 㡈 㡉 㡊 㡋 㡌 㡍 㡎 㡏 㡐 㡑 㡒 㡓 㡔 㡕 㡖 㡗 㡘 㡙 㡚 㡛 㡜 㡝 㡞 㡟 㡠 㡡 㡢 㡣 㡤 㡥 㡦 㡧 㡨 㡩 㡪 㡫 㡬 㡭 㡮 㡯 㡰 㡱 㡲 㡳 㡴 㡵 㡶 㡷 㡸 㡹 㡺 㡻 㡼 㡽 㡾 㡿 㢀 㢁 㢂 㢃 㢄 㢅 㢆 㢇 㢈 㢉 㢊 㢋 㢌 㢍 㢎 㢏 㢐 㢑 㢒 㢓 㢔 㢕 㢖 㢗 㢘 㢙 㢚 㢛 㢜 㢝 㢞 㢟 㢠 㢡 㢢 㢣 㢤 㢥 㢦 㢧 㢨 㢩 㢪 㢫 㢬 㢭 㢮 㢯 㢰 㢱 㢲 㢳 㢴 㢵 㢶 㢷 㢸 㢹 㢺 㢻 㢼 㢽 㢾 㢿 㣀 㣁 㣂 㣃 㣄 㣅 㣆 㣇 㣈 㣉 㣊 㣋 㣌 㣍 㣎 㣏 㣐 㣑 㣒 㣓 㣔 㣕 㣖 㣗 㣘 㣙 㣚 㣛 㣜 㣝 㣞 㣟 㣠 㣡 㣢 㣣 㣤 㣥 㣦 㣧 㣨 㣩 㣪 㣫 㣬 㣭 㣮 㣯 㣰 㣱 㣲 㣳 㣴 㣵 㣶 㣷 㣸 㣹 㣺 㣻 㣼 㣽 㣾 㣿 㤀 㤁 㤂 㤃 㤄 㤅 㤆 㤇 㤈 㤉 㤊 㤋 㤌 㤍 㤎 㤏 㤐 㤑 㤒 㤓 㤔 㤕 㤖 㤗 㤘 㤙 㤚 㤛 㤜 㤝 㤞 㤟 㤠 㤡 㤢 㤣 㤤 㤥 㤦 㤧 㤨 㤩 㤪 㤫 㤬 㤭 㤮 㤯 㤰 㤱 㤲 㤳 㤴 㤵 㤶 㤷 㤸 㤹 㤺 㤻 㤼 㤽 㤾 㤿 㥀 㥁 㥂 㥃 㥄 㥅 㥆 㥇 㥈 㥉 㥊 㥋 㥌 㥍 㥎 㥏 㥐 㥑 㥒 㥓 㥔 㥕 㥖 㥗 㥘 㥙 㥚 㥛 㥜 㥝 㥞 㥟 㥠 㥡 㥢 㥣 㥤 㥥 㥦 㥧 㥨 㥩 㥪 㥫 㥬 㥭 㥮 㥯 㥰 㥱 㥲 㥳 㥴 㥵 㥶 㥷 㥸 㥹 㥺 㥻 㥼 㥽 㥾 㥿 㦀 㦁 㦂 㦃 㦄 㦅 㦆 㦇 㦈 㦉 㦊 㦋 㦌 㦍 㦎 㦏 㦐 㦑 㦒 㦓 㦔 㦕 㦖 㦗 㦘 㦙 㦚 㦛 㦜 㦝 㦞 㦟 㦠 㦡 㦢 㦣 㦤 㦥 㦦 㦧 㦨 㦩 㦪 㦫 㦬 㦭 㦮 㦯 㦰 㦱 㦲 㦳 㦴 㦵 㦶 㦷 㦸 㦹 㦺 㦻 㦼 㦽 㦾 㦿 㧀 㧁 㧂 㧃 㧄 㧅 㧆 㧇 㧈 㧉 㧊 㧋 㧌 㧍 㧎 㧏 㧐 㧑 㧒 㧓 㧔 㧕 㧖 㧗 㧘 㧙 㧚 㧛 㧜 㧝 㧞 㧟 㧠 㧡 㧢 㧣 㧤 㧥 㧦 㧧 㧨 㧩 㧪 㧫 㧬 㧭 㧮 㧯 㧰 㧱 㧲 㧳 㧴 㧵 㧶 㧷 㧸 㧹 㧺 㧻 㧼 㧽 㧾 㧿 㨀 㨁 㨂 㨃 㨄 㨅 㨆 㨇 㨈 㨉 㨊 㨋 㨌 㨍 㨎 㨏 㨐 㨑 㨒 㨓 㨔 㨕 㨖 㨗 㨘 㨙 㨚 㨛 㨜 㨝 㨞 㨟 㨠 㨡 㨢 㨣 㨤 㨥 㨦 㨧 㨨 㨩 㨪 㨫 㨬 㨭 㨮 㨯 㨰 㨱 㨲 㨳 㨴 㨵 㨶 㨷 㨸 㨹 㨺 㨻 㨼 㨽 㨾 㨿 㩀 㩁 㩂 㩃 㩄 㩅 㩆 㩇 㩈 㩉 㩊 㩋 㩌 㩍 㩎 㩏 㩐 㩑 㩒 㩓 㩔 㩕 㩖 㩗 㩘 㩙 㩚 㩛 㩜 㩝 㩞 㩟 㩠 㩡 㩢 㩣 㩤 㩥 㩦 㩧 㩨 㩩 㩪 㩫 㩬 㩭 㩮 㩯 㩰 㩱 㩲 㩳 㩴 㩵 㩶 㩷 㩸 㩹 㩺 㩻 㩼 㩽 㩾 㩿 㪀 㪁 㪂 㪃 㪄 㪅 㪆 㪇 㪈 㪉 㪊 㪋 㪌 㪍 㪎 㪏 㪐 㪑 㪒 㪓 㪔 㪕 㪖 㪗 㪘 㪙 㪚 㪛 㪜 㪝 㪞 㪟 㪠 㪡 㪢 㪣 㪤 㪥 㪦 㪧 㪨 㪩 㪪 㪫 㪬 㪭 㪮 㪯 㪰 㪱 㪲 㪳 㪴 㪵 㪶 㪷 㪸 㪹 㪺 㪻 㪼 㪽 㪾 㪿 㫀 㫁 㫂 㫃 㫄 㫅 㫆 㫇 㫈 㫉 㫊 㫋 㫌 㫍 㫎 㫏 㫐 㫑 㫒 㫓 㫔 㫕 㫖 㫗 㫘 㫙 㫚 㫛 㫜 㫝 㫞 㫟 㫠 㫡 㫢 㫣 㫤 㫥 㫦 㫧 㫨 㫩 㫪 㫫 㫬 㫭 㫮 㫯 㫰 㫱 㫲 㫳 㫴 㫵 㫶 㫷 㫸 㫹 㫺 㫻 㫼 㫽 㫾 㫿 㬀 㬁 㬂 㬃 㬄 㬅 㬆 㬇 㬈 㬉 㬊 㬋 㬌 㬍 㬎 㬏 㬐 㬑 㬒 㬓 㬔 㬕 㬖 㬗 㬘 㬙 㬚 㬛 㬜 㬝 㬞 㬟 㬠 㬡 㬢 㬣 㬤 㬥 㬦 㬧 㬨 㬩 㬪 㬫 㬬 㬭 㬮 㬯 㬰 㬱 㬲 㬳 㬴 㬵 㬶 㬷 㬸 㬹 㬺 㬻 㬼 㬽 㬾 㬿 㭀 㭁 㭂 㭃 㭄 㭅 㭆 㭇 㭈 㭉 㭊 㭋 㭌 㭍 㭎 㭏 㭐 㭑 㭒 㭓 㭔 㭕 㭖 㭗 㭘 㭙 㭚 㭛 㭜 㭝 㭞 㭟 㭠 㭡 㭢 㭣 㭤 㭥 㭦 㭧 㭨 㭩 㭪 㭫 㭬 㭭 㭮 㭯 㭰 㭱 㭲 㭳 㭴 㭵 㭶 㭷 㭸 㭹 㭺 㭻 㭼 㭽 㭾 㭿 㮀 㮁 㮂 㮃 㮄 㮅 㮆 㮇 㮈 㮉 㮊 㮋 㮌 㮍 㮎 㮏 㮐 㮑 㮒 㮓 㮔 㮕 㮖 㮗 㮘 㮙 㮚 㮛 㮜 㮝 㮞 㮟 㮠 㮡 㮢 㮣 㮤 㮥 㮦 㮧 㮨 㮩 㮪 㮫 㮬 㮭 㮮 㮯 㮰 㮱 㮲 㮳 㮴 㮵 㮶 㮷 㮸 㮹 㮺 㮻 㮼 㮽 㮾 㮿 㯀 㯁 㯂 㯃 㯄 㯅 㯆 㯇 㯈 㯉 㯊 㯋 㯌 㯍 㯎 㯏 㯐 㯑 㯒 㯓 㯔 㯕 㯖 㯗 㯘 㯙 㯚 㯛 㯜 㯝 㯞 㯟 㯠 㯡 㯢 㯣 㯤 㯥 㯦 㯧 㯨 㯩 㯪 㯫 㯬 㯭 㯮 㯯 㯰 㯱 㯲 㯳 㯴 㯵 㯶 㯷 㯸 㯹 㯺 㯻 㯼 㯽 㯾 㯿 㰀 㰁 㰂 㰃 㰄 㰅 㰆 㰇 㰈 㰉 㰊 㰋 㰌 㰍 㰎 㰏 㰐 㰑 㰒 㰓 㰔 㰕 㰖 㰗 㰘 㰙 㰚 㰛 㰜 㰝 㰞 㰟 㰠 㰡 㰢 㰣 㰤 㰥 㰦 㰧 㰨 㰩 㰪 㰫 㰬 㰭 㰮 㰯 㰰 㰱 㰲 㰳 㰴 㰵 㰶 㰷 㰸 㰹 㰺 㰻 㰼 㰽 㰾 㰿 㱀 㱁 㱂 㱃 㱄 㱅 㱆 㱇 㱈 㱉 㱊 㱋 㱌 㱍 㱎 㱏 㱐 㱑 㱒 㱓 㱔 㱕 㱖 㱗 㱘 㱙 㱚 㱛 㱜 㱝 㱞 㱟 㱠 㱡 㱢 㱣 㱤 㱥 㱦 㱧 㱨 㱩 㱪 㱫 㱬 㱭 㱮 㱯 㱰 㱱 㱲 㱳 㱴 㱵 㱶 㱷 㱸 㱹 㱺 㱻 㱼 㱽 㱾 㱿 㲀 㲁 㲂 㲃 㲄 㲅 㲆 㲇 㲈 㲉 㲊 㲋 㲌 㲍 㲎 㲏 㲐 㲑 㲒 㲓 㲔 㲕 㲖 㲗 㲘 㲙 㲚 㲛 㲜 㲝 㲞 㲟 㲠 㲡 㲢 㲣 㲤 㲥 㲦 㲧 㲨 㲩 㲪 㲫 㲬 㲭 㲮 㲯 㲰 㲱 㲲 㲳 㲴 㲵 㲶 㲷 㲸 㲹 㲺 㲻 㲼 㲽 㲾 㲿 㳀 㳁 㳂 㳃 㳄 㳅 㳆 㳇 㳈 㳉 㳊 㳋 㳌 㳍 㳎 㳏 㳐 㳑 㳒 㳓 㳔 㳕 㳖 㳗 㳘 㳙 㳚 㳛 㳜 㳝 㳞 㳟 㳠 㳡 㳢 㳣 㳤 㳥 㳦 㳧 㳨 㳩 㳪 㳫 㳬 㳭 㳮 㳯 㳰 㳱 㳲 㳳 㳴 㳵 㳶 㳷 㳸 㳹 㳺 㳻 㳼 㳽 㳾 㳿 㴀 㴁 㴂 㴃 㴄 㴅 㴆 㴇 㴈 㴉 㴊 㴋 㴌 㴍 㴎 㴏 㴐 㴑 㴒 㴓 㴔 㴕 㴖 㴗 㴘 㴙 㴚 㴛 㴜 㴝 㴞 㴟 㴠 㴡 㴢 㴣 㴤 㴥 㴦 㴧 㴨 㴩 㴪 㴫 㴬 㴭 㴮 㴯 㴰 㴱 㴲 㴳 㴴 㴵 㴶 㴷 㴸 㴹 㴺 㴻 㴼 㴽 㴾 㴿 㵀 㵁 㵂 㵃 㵄 㵅 㵆 㵇 㵈 㵉 㵊 㵋 㵌 㵍 㵎 㵏 㵐 㵑 㵒 㵓 㵔 㵕 㵖 㵗 㵘 㵙 㵚 㵛 㵜 㵝 㵞 㵟 㵠 㵡 㵢 㵣 㵤 㵥 㵦 㵧 㵨 㵩 㵪 㵫 㵬 㵭 㵮 㵯 㵰 㵱 㵲 㵳 㵴 㵵 㵶 㵷 㵸 㵹 㵺 㵻 㵼 㵽 㵾 㵿 㶀 㶁 㶂 㶃 㶄 㶅 㶆 㶇 㶈 㶉 㶊 㶋 㶌 㶍 㶎 㶏 㶐 㶑 㶒 㶓 㶔 㶕 㶖 㶗 㶘 㶙 㶚 㶛 㶜 㶝 㶞 㶟 㶠 㶡 㶢 㶣 㶤 㶥 㶦 㶧 㶨 㶩 㶪 㶫 㶬 㶭 㶮 㶯 㶰 㶱 㶲 㶳 㶴 㶵 㶶 㶷 㶸 㶹 㶺 㶻 㶼 㶽 㶾 㶿 㷀 㷁 㷂 㷃 㷄 㷅 㷆 㷇 㷈 㷉 㷊 㷋 㷌 㷍 㷎 㷏 㷐 㷑 㷒 㷓 㷔 㷕 㷖 㷗 㷘 㷙 㷚 㷛 㷜 㷝 㷞 㷟 㷠 㷡 㷢 㷣 㷤 㷥 㷦 㷧 㷨 㷩 㷪 㷫 㷬 㷭 㷮 㷯 㷰 㷱 㷲 㷳 㷴 㷵 㷶 㷷 㷸 㷹 㷺 㷻 㷼 㷽 㷾 㷿 㸀 㸁 㸂 㸃 㸄 㸅 㸆 㸇 㸈 㸉 㸊 㸋 㸌 㸍 㸎 㸏 㸐 㸑 㸒 㸓 㸔 㸕 㸖 㸗 㸘 㸙 㸚 㸛 㸜 㸝 㸞 㸟 㸠 㸡 㸢 㸣 㸤 㸥 㸦 㸧 㸨 㸩 㸪 㸫 㸬 㸭 㸮 㸯 㸰 㸱 㸲 㸳 㸴 㸵 㸶 㸷 㸸 㸹 㸺 㸻 㸼 㸽 㸾 㸿 㹀 㹁 㹂 㹃 㹄 㹅 㹆 㹇 㹈 㹉 㹊 㹋 㹌 㹍 㹎 㹏 㹐 㹑 㹒 㹓 㹔 㹕 㹖 㹗 㹘 㹙 㹚 㹛 㹜 㹝 㹞 㹟 㹠 㹡 㹢 㹣 㹤 㹥 㹦 㹧 㹨 㹩 㹪 㹫 㹬 㹭 㹮 㹯 㹰 㹱 㹲 㹳 㹴 㹵 㹶 㹷 㹸 㹹 㹺 㹻 㹼 㹽 㹿 㺀 㺁 㺂 㺃 㺄 㺅 㺆 㺇 㺈 㺉 㺊 㺋 㺌 㺍 㺎 㺏 㺐 㺑 㺒 㺓 㺔 㺕 㺖 㺗 㺘 㺙 㺚 㺛 㺜 㺝 㺞 㺟 㺠 㺡 㺢 㺣 㺤 㺥 㺦 㺧 㺨 㺩 㺪 㺫 㺬 㺭 㺮 㺯 㺰 㺱 㺲 㺳 㺴 㺵 㺶 㺷 㺸 㺹 㺺 㺻 㺼 㺽 㺾 㺿 㻀 㻁 㻂 㻃 㻄 㻅 㻆 㻇 㻈 㻉 㻊 㻋 㻌 㻍 㻎 㻏 㻐 㻑 㻒 㻓 㻔 㻕 㻖 㻗 㻘 㻙 㻚 㻛 㻜 㻝 㻞 㻟 㻠 㻡 㻢 㻣 㻤 㻥 㻦 㻧 㻨 㻩 㻪 㻫 㻬 㻭 㻮 㻯 㻰 㻱 㻲 㻳 㻴 㻵 㻶 㻷 㻸 㻹 㻺 㻻 㻼 㻽 㻾 㻿 㼀 㼁 㼂 㼃 㼄 㼅 㼆 㼇 㼈 㼉 㼊 㼋 㼌 㼍 㼎 㼏 㼐 㼑 㼒 㼓 㼔 㼕 㼖 㼗 㼘 㼙 㼚 㼛 㼜 㼝 㼞 㼟 㼠 㼡 㼢 㼣 㼤 㼥 㼦 㼧 㼨 㼩 㼪 㼫 㼬 㼭 㼮 㼯 㼰 㼱 㼲 㼳 㼴 㼵 㼶 㼷 㼸 㼹 㼺 㼻 㼼 㼽 㼾 㼿 㽀 㽁 㽂 㽃 㽄 㽅 㽆 㽇 㽈 㽉 㽊 㽋 㽌 㽍 㽎 㽏 㽐 㽑 㽒 㽓 㽔 㽕 㽖 㽗 㽘 㽙 㽚 㽛 㽜 㽝 㽞 㽟 㽠 㽡 㽢 㽣 㽤 㽥 㽦 㽧 㽨 㽩 㽪 㽫 㽬 㽭 㽮 㽯 㽰 㽱 㽲 㽳 㽴 㽵 㽶 㽷 㽸 㽹 㽺 㽻 㽼 㽽 㽾 㽿 㿀 㿁 㿂 㿃 㿄 㿅 㿆 㿇 㿈 㿉 㿊 㿋 㿌 㿍 㿎 㿏 㿐 㿑 㿒 㿓 㿔 㿕 㿖 㿗 㿘 㿙 㿚 㿛 㿜 㿝 㿞 㿟 㿠 㿡 㿢 㿣 㿤 㿥 㿦 㿧 㿨 㿩 㿪 㿫 㿬 㿭 㿮 㿯 㿰 㿱 㿲 㿳 㿴 㿵 㿶 㿷 㿸 㿹 㿺 㿻 㿼 㿽 㿾 㿿 㸀 㸁 㸂 㸃 㸄 㸅 㸆 㸇 㸈 㸉 㸊 㸋 㸌 㸍 㸎 㸏 㸐 㸑 㸒 㸓 㸔 㸕 㸖 㸗 㸘 㸙 㸚 㸛 㸜 㸝 㸞 㸟 㸠 㸡 㸢

田島さんは、国語の授業で、【Ⅰ】の古典の文章を読み、【Ⅱ】のように内容について発表しました。後の(一)～(五)の問いに答えなさい。

【Ⅰ】 古典の文章

① 知 習 道 事

至りたる上手の能をば、師によく習ひては似すべし。② 習はでは似すべからず。③

(善を究めた達人の能は) (自分の師匠に基本を十分に)

(似せてもよい)

(習いもしないで)

上手は、はや究め覚え終りて、さて安き位に至る風体の、見る人のため面白きを、ただ面白きとばかり心得て、

(すでに芸を体得しきって、その結果、至難な芸をやすやすと演じる段階に到達した様下で)

(観客にとつて興味深い様子であるのに)

初心これを似すれば、「似せたり」とは見ゆれども、面白き感なし。

(初心の者が)

(「似ている」とは見えるけれども)

上手は、はや年来、心も身も十分に習ひ至り過ぎて、さて、動七分身に身を惜しみて、安くする所を、初心の人、

(すでに長い年月、心も身も十分にはたらかす基本を習い究め、熟達しきって)

(その後)

(「割の心で体の動きを七割くらいに控えて、やすやすと演じているのを)

習ひもせで似すれば、心も身も七分になるなり。

(師匠から習いもしないで似せると)

さるほどに詰まるなり。

(そうしているうちに行き詰まるのである)

※ 習道＝能(日本の芸能の一つで、歌舞劇)の道を正しく学習すること。

【Ⅱ】発表の一部

ぼくはこの文章を読んで、「初心」という言葉に興味を持ち、意味を調べてみました。すると、「初心」という言葉には、
 ⑦ 何かしようと最初に思いたったときの、ひたむきな気持ち。

① 学問・技芸などを、習い始めたばかりであること。

② 世なれていないこと。(国語辞典より)

という二つの意味があることがわかりました。今回読んだ「知習道事」の中では、「**A**」の意味で使われています。

また、ことわざの「初心忘るべからず」には、

④ 物事を始めたときの真剣な気持ちを忘れてはならないということ。(ことわざ辞典より)に加えて、

⑤ 能で、若年のころに学んだ芸や、その当時の未熟だったこと、また、それぞれの時期での初めての経験を忘れてはいけないという教え。(国語大辞典より)
 という意味がありました。「知習道事」の内容を踏まえると、「常に自分の未熟さを忘れず、**B**」と筆者は伝えようとしているのではないかと思います。

(一) 【Ⅰ】の ① 知習道事 は、「習道を知る事」と読む。この部分に返り点を補ったものとして、最も適切なものを、次のア～エの中から選んで、その記号を書きなさい。

ア 知習道事 イ 知習道事 ウ 知習道事 エ 知習道事

(二) 【Ⅰ】の ② 習ひて の読み方を現代仮名遣いに直して、全て平仮名で書きなさい。

(三) 【Ⅰ】に ③ 習はでは似すべからず とあるが、この部分に省略されている主語として最も適切なものを、次のア～エの中から選んで、その記号を書きなさい。

ア 初心 イ 上手 ウ 師 エ 見る人

(四) 【Ⅱ】の **A** に入る意味として、最も適切なものを、【Ⅱ】の ⑦～⑨の中から選んで、その記号を書きなさい。

(五) 【Ⅱ】の **B** に入る内容として、最も適切なものを、次のア～エの中から選んで、その記号を書きなさい。

ア 各段階にふさわしい芸を一つ一つ習得し、着実に上達を目指す
 イ 自分の考えを大事にし、のびのびと自由に芸術性を高めていこう
 ウ 最新の流行を取り入れて、芸が新鮮さを失わないように努力しよう
 エ 速やかな成長のために、熟達した芸をまねすることから始めよう

次の文章について、後の(一)～(七)の問いに答えなさい。(1)～(7)は段落番号を表す。

① 相互協調的自己観のもとで自己形成をしてきた私たち日本人は、いわば関係性としての自己を生きている。独立的自己観のもとで自己形成が行われる欧米人のように個としての自己を生きているのではない。私流に言えば、日本人は「個」の世界を生きているのではなく、「間柄」の世界を生きているのである。(ヘア)

② ①「間柄」の世界を生きる私たち日本人は、②双方向の視点をもつ。「I」が「you」に対して独立的に、つまり一方的に自分を出すというのが、「個」の世界のあり方の基本と言える。自分の思うことを伝える際に、とりあえず相手は関係ない。人の顔色をうかがう必要はない。(ヘイ)

③ 「個」の世界を生きるなら、ただ自分の思うところを自己主張していればよい。だが、「間柄」の世界を生きるとなると、そう単純にはいかない。相手のことを意識し、相手との関係にふさわしいように、相手を傷つけないように、気まづいことにならないように、相手が不満に思うようなことにならないようになどと、相手を配慮しつつ、自分の思うところを伝えることになる。持ち前の共感能力を発揮して、相手が何を思っているか、相手が何を望んでいるかなど相手のことを配慮しながら、双方が心地よさを失わないようにものの言い方を調整する。思うことをそのまま言えいいというように単純にはいかない。(ウ)

④ ここでわかるのは、はっきりと自己主張できないのは、べつに情けないことではなく、相手の気持ちや考えていることがわかるし、相

手の立場がわかるから、一方的にこっちの言い分を押しつけるようなことができないのだということである。相手が何を望んでいるか、どう感じているかなど相手のことを気にするのも、主体性がないというのではなく、相手の期待に応えたいから、自分自身の満足よりも相手の満足を優先させようとするからである。言いたいことがあっても言えなかったり、要求があるのに遠慮したりするのも、^{※1}③自己主張のスキルが未熟だということではなく、相手に負担をかけたくないし、相手からずうずうしい人物と見られたくないからだ。(ヘエ)

⑤ このように常に相手を意識して行動しているのである。私たち日本人には、他者から独立した自己などというものはない。だからといって未熟なのではない。日本文化においては、他者から切り離された自己の方が、相手のことを配慮できないという意味で未熟と見なされる。

⑥ 「間柄」の中で自己のあり方が決まる。人に頼りたい友だちの前ではA自分になり、面倒見のよい友だちの前では多少B自分になる。先生から優等生として期待されると期待に応えるべく必死に頑張る自分になる。上司や同僚から「できる人物」と見なされると、かなり無理をしても人並み以上に仕事をこなそうとする自分になる。

⑦ このように相手との関係が前提になる自己のあり方が日本人的特徴と言える。^{※2}グローバル化に絡めて言えば、そのように相手を配慮する姿勢が利己的な心に^{※3}ブレイキをかけ、相手や異文化を尊重する寛容さにつながるのではないだろうか。

(榎本博明『みっともない』と日本人』による。一部改)

※1 スキル＝技能。

※2 グローバル化＝文化や経済などの活動が、国や地域の枠組みをこえて行われること。

- (一) 次の一文は、本文中の「ア」「エ」のどこに入るか。最も適切な箇所の記号を書きなさい。

ただこちらが言いたいことを伝える。

- (二) ①「間柄」の世界を生きる私たち日本人 とあるが、日本人がどのように思いを伝えるかについて、ゆきこさんは、次のようにノートにまとめた。ノートの
トの I と II に入る最も適切な語句を、本文中から I は六字、II は九字で抜き出して書きなさい。

日本人は、I にふさわしい言い方を考慮し、相手の思考や感情などを知覚し共感することで、双方が心地よさを失わないように常に配慮しつつ、II しながら伝える。

- (三) ② 双方向の視点 とあるが、何と何の視点か。「何」にあたる二つの言葉を、2・3段落の本文中からそれぞれ漢字二字で抜き出して書きなさい。

- (四) 本文中の に入る言葉として、最も適切なものを、次のア～エの中から選んで、その記号を書きなさい。

ア つまり イ なぜか ウ とはいえ エ けれど

- (五) 本文中の A と B に入る言葉の組み合わせとして、最も適切なものを、次のア～エの中から選んで、その記号を書きなさい。

ア A 忙しい B ゆずる イ A 悩ましい B 弱る
ウ A 慎ましい B 照れる (エ) A 頼ましい B 甘える

(六) ③ 自己主張のスキルが未熟だということ とあるが、欧米人と日本人は、自己主張における未熟さについて、それぞれどのように考えているか。最も適切なものを、次のア～エの中から選んで、その記号を書きなさい。

- ア 欧米人は、相手に自分の考えを押しつけようとする主張を未熟と考え、日本人は、相手の批判を受けて主張を改めることを未熟と考える。
- イ 欧米人は、相手の考え方を尊重せずに主張することを未熟と考え、日本人は、相手への配慮を欠いた状態で主張することを未熟と考える。
- ウ 欧米人は、相手が誰であろうと自分の主張ができないことを未熟と考え、日本人は、相手への気遣いをせずに主張することを未熟と考える。
- エ 欧米人は、相手に要求したいことがあるのに主張しないことを未熟と考え、日本人は、相手が満足する結果を優先することを未熟と考える。

(七) グローバル化に絡めて言えば、そのように相手を配慮する姿勢が利己的な心にブレイキをかけ、相手や異文化を尊重する寛容さにつながるのではないだろうか とあるが、グローバル社会において、あなたは次のA・Bのどちらの姿勢が大切だと考えるか。本文を参考にして、あなたの考えを書きなさい。

ただし、以下の〈条件〉に従うこと。

A 「日本人は、できるだけ相手に配慮した言動をしようと考え。グローバル社会では、そのように、相手に配慮する姿勢を重視して、相手や異文化を尊重するべきである。」

B 「グローバル社会では、強い意志を持って、自己主張をしなければならぬ。相手に配慮することよりも、自分の意見を押し通す姿勢を、日本人はもっと大切にすべきだ。」

〈条件〉

- 1 百字以上、百五十字以内で書くこと。(句読点を含む。)
- 2 二段落構成とし、第一段落には、A・Bのどちらの意見に賛成かを明確に書き、第二段落には、その理由や自分の考えを書くこと。
- 3 正しい原稿用紙の使い方をすること。ただし、題名と氏名は書かないこと。また、{ や || などの記号(符号)を用いた訂正もしないこと。
- 4 文体は、常体「だ・である」で書くこと。

四

次の(一)～(三)の問いに答えなさい。

(一) 次の(1)～(6)の——線部について、片仮名の部分を漢字で、漢字の部分の読みを平仮名で書きなさい。(漢字は楷書^{がしよ}で書くこと。)

- (1) 米をチヨゾウする。
- (2) 里山で静かにクらす。
- (3) テッキンの建物。
- (4) 向こう側が透けて見える。
- (5) 優雅な立ち振る舞い。
- (6) 激しい痛みに襲^{おそ}われる。

(二) 行書で書かれた次のア～エの漢字を楷書で書いた場合、「蒸」と総画数が同じになるものを一つ選んで、その記号を書きなさい。

ウ	ア
疑	閑
エ	イ
路	務

(三) 「明日は数学と社会のテストがあるそうです。」を文節に区切ったものとして、最も適切なものを、次のア～エの中から選んで、その記号を書きなさい。

- ア 明日は／数学と／社会の／テストが／あるそうです。
- イ 明日は／数学と／社会の／テストが／ある／そうです。
- ウ 明日は／数学と社会の／テストが／ある／そうです。
- エ 明日は／数学と／社会の／テストが／ある／そう／です。